
週刊馬券予想小説「ロブロイツ」

アキラ・スターマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

週刊馬券予想小説「ロブロイツ」

【Nコード】

N1449D

【作者名】

アキラ・スターマン

【あらすじ】

札幌のバーマスターで馬券師の航介

連載第1号

マイルCS。

Dメジャーが馬なりで4コーナーを抜け出し、直線、後続を振り切って貫禄の勝利。

アンカツ（安藤勝巳）は、まさに人馬一体に馬を操り、もはや神の域にあると言っても過言ではない。

航介の本命アグネスアークは激しい三着争い。

ゴールまで、あと20mというところで腕っこきの藤田が腰を上げ、戦闘終了しちまって四着。

狸小路WINSで馬券を買って観戦していた航介はプツン。

勝負に徹する姿勢を貫いてきた藤田の裏切りが許せない。

その日の夜、そのレースの三連単を取った劇団主宰の会社員ナバちゃん、Aアークの脚元に異常を感じた藤田が追うのを止めたのを知るまでは、ヤサグレマスターだったらしい。

ナバちゃんが早く来てくれて良かった。

新規の客に当たり散らしてもしたら…。

火曜日、BARをオープンしてから始めての休日。

正午に起きて藤子と喫茶店でランチ。

夜は、弟分の大沢がいる狸小路の西の外れの、おでん屋「波止場」薄いニツカの水割りをチビつきながら、アテをつまんでいる。

「なんだよマスター、素っ気ないモンばつかじゃん。モツ煮を食わんから酒が進まないんだよ。金はいいいからつまみなよ」

大沢が威勢よくモツ煮を二人の前に置いた。

足を組んで、両肘をカウンターにつき、首を下げてうなだれ、今に

も突っ伏して意識を失いかねない様を見て、大沢が藤子をみやる。

「ねえ…大丈夫？帰ろうか？」

「大丈夫だよ。ちよつと考え事。オーディオを新調するかどうか…」

「あれっ？新しくしたんじゃないの？開業資金で買うつて言ってたしや」

「いやあ…ついつい内装や備品に高級感を求めてしまつて」

航介が「開業資金倍増計画」と称し、天皇賞（秋）とJBCクラシックでデカい勝負をしてスベツたのを知るのは、バーテンダー仲間のヒロ坊とチビ烈こと凜果だけ。

金額はとても公言できないんだとか。

開業の際の使途不明金がバレないよう話題をかえてやがる。

すっかりと冬景色の札幌。

身が縮みあがるほど寒いのだが、藤子は二人で歩くのが久しぶりだから、狸小路を歩きたいという。

ヒロ坊から借りっぱなしの白地のハーフコートの襟を立て、毛糸の帽子を深々と被る航介。

「寒くねえのか？」

「平気よ。若いから」

「バカにしてるべ」

「いいや。大切に思うよ。航介は？」

「かわいいよ。若いから」

「バカにしてるべ」

「んにゃ、大切に思う」「なら、良しっ」

祝日の金曜日、3日間開催の初日を惨敗してやってきた水道屋の晴彦が一番客。

のっけから競馬新聞を広げてやがる。

「俺は？サンライズバツカス。ハイペースで先行勢が垂れるのを神様、安藤勝巳が捌いてブツ斬りつてことよ」

BGMにビル・エヴァンスをチョイスし、音に合わせながらダンディーマスターになりきったばかりなのに、馬券の話なんだもの…。
根っからの馬キチ航介、当然に呼応する。

「いや、下手すりゃ？ヴァーミリアンが逃げるほどのスローペースになるぜ。俺は先行勢の馬券になると思うから、本命は3歳の地方最強馬、内田博幸の？フリオソだ」

「ペースしだいってことか？外国馬が乱ペースを引き起こすんじゃないか？」

「去年までのジャパンカップは招待制で、招かれた外国馬が勝負を度外視して走っていたが、今年からは本格的な国際レースに位置付けられて、自費で渡航してレースに臨むんだ。それなりの勝算を持っていると考えるべきで、ちゃんとペースを見極めて勝負してくるさ」

「三歳馬の？ドラゴンファイヤーってのも勢いがある」

「心配ない、田中勝春が、ちゃんと脚を余してくれる。内田が完璧に手の内に入れている？フリオソは、休み明けで古馬相手のG？で二着。並の三歳馬じゃない。たぶんカネヒキリ級の逸材だぜ」

「単複か？」

「ああ、もちろん。馬連も買ってみる」

●ジャパンカップダート（G？）

東京競馬場D2100m

？フリオソ（内田博幸）

単勝？2万円

複勝？5万円

馬連

？ ？？各2千円

？ ？1千円

まだ20時前、週末や祝日は総じて客足が遅くなる。

晴彦が競馬新聞のページをめくった。

「芝のジャパンカップは、どうだ？」

「聞かなくともわかるだろう」

「Aムーンか？」

「ああ…ドバイでも勝った日本最強馬を絶対視している。世界最強かもしれん」

「能力のピークを越えたって批評があつたな」

「フハハ。まあレースが終わればわかる。前走の天皇賞だって不利さえなければ勝ってたさ。あんたはウオツカ？」

「このレースはダービーでの実績がモノをいう。Mサムソンかウオツカか…悩んでいる。それこそハイペースだろうからウオツカの末脚が爆発しそうにも思うが、Mサムソンの勝負強さの方が上だと思う」

「気持ちはわかるがAムーン的能力が図抜けているのは、どうしようもない事実なんだよ。マイルCSの結果で答えは明白だ」

晴彦が訝しげな視線を向けると航介が続けた。

「マイルCSで、天皇賞の二、三着馬は、着外だったDメジャーに捻り潰された。ということは、不利がなければDメジャーは天皇賞で二着以上だったはずだ。Mサムソンは全く不利を受けずに抜け出して勝ったが、あの着差なら、Dメジャーとイイ勝負だったってこと。Mサムソンの競走能力は、現時点ではDメジャー級ってところ」

「ドバイか…」

「そう。そのとおり。Aムーンがドバイの国際G?を勝ったレース

で、国内最強の中距離馬と称えられていたDメジャーは三着どまりだった」

「なるほどな。距離適性を度外視したら、お前の論法は説得力あるよ。ウオツカはどうだ？」

「俺はウオツカの方が怖い。調教も抜群に動いたし、3歳牝馬世代はシャレにならんくらい強い。それとダービー実績を考えるなら、Dインパクトの二着だったインティライミも怖い1頭、やっと本格化して勢いが凄いから」

エラく自信ありげに語る航介、午前二時にやってきたヒ口坊にも同じ話をしている。

「大将の本命は、どっちもダーレーJFが馬主ですね」

「へえゝ気付かなかった。代表は高橋つたつけ。産業ではなく文化としての競馬界を創りたいって点では共感できる」

鉄火場の勝負師気取りが、文化って…

●ジャパンカップ（G?）

東京競馬場 芝2400m

? アドマイヤムーン（岩田康誠）

単勝3万円

複勝7万円

馬連

? ? 1千円

? ?? 各2千円

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449d/>

週刊馬券予想小説「ロブロイツ」

2010年10月9日21時02分発行